The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	朱子卦變說について
Author(s)	花崎, 隆一郎
Citation	中国研究集刊. 1989, 8, p. 20-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61098
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

朱子卦變說について

花崎隆一郎

序　言
一　卦變說十九條の論理と意義
二　卦變說の性格
結　語
「本義」卦變說一覽表
註

序　言

一般に所謂「朱子卦變」と稱せられるものには三種類ある。一は「易本義」[1]（以下、單に「本義」とのみ略記する）中に見られる解經のための「卦變說」十九條であり、二は同じく「本義」の篇首に掲げるところの卦の成立を說明するための「卦變圖」であり、三は「易學啓蒙」『考變占第四』の末尾に付された筮占のための卦變圖としての「三十二圖」である。ここではそのうち、彖傳の說明、延いては經文の解釋に不可缺な要素としての一のみに限定する。

さて本稿の目的は、この一の論理と意義ならびに性格の要點を與う限り簡明に示すことにある。而してこれを出發點として、ひきつづきその由來、はたまた二の構成と組織ならびに由來をも延長的に別稿において考察する豫定である。從って本稿をそれらすべての基礎として位置づけておきたい。なお、本稿中、時として引用する「相生圖」とは、前稿の「『李圖』攷」[2]で詳述した李挺之「六十四卦相生圖」のことである。

また、本稿では紙幅の都合上、卦變說を述べるに際し、その要點を「本義」より拔萃して各卦の冒頭に掲げるものの、卦變說展開の基礎となった卦辭または彖傳のことばは必要部分の引用のみにとどめることとした。

一　卦變說十九條の論理と意義

1　訟 ䷅

○　九二中實、上无應與、又爲加憂。且於卦變、自遯而來、爲剛來居二、而當下卦之中、有有孚而見窒、能懼而得中之象。

（本義）

朱子は訟を、遯䷠の九三が二の位に降り來ったものと考える。その結果、下卦坎☵の中位を占め、孚有る中實の卦象となる。然るに九二には應爻がない。これ即ち、卦辭に所謂「孚有りて窒がる」の意である。次に、下卦坎を「加憂」とすることは説卦傳（「本義」分章第十一章）に説くところである。

これらを要するに、この「孚有りて窒がる」訟卦も、「加憂」、即ち「惕れて」（卦辭）、降り來って中位を得た九二の如き「中の道を守れば吉となる」（卦辭）ことを説くのである。

2　泰䷊

○　自歸妹來、則六往居四、九來居三也。占者有陽剛之德、則吉而亨矣。（本義）

泰は、歸妹䷵の六三と九四との爻位の交換により得られた卦である、と考えるのが「本義」の論理である。精しくいえば、歸妹の柔爻（六三）即ち「小」が上位に上り往き、剛爻（九四）即ち「大」が下位に下り來って泰卦となる、と解するのである。これ即ち卦辭に所謂「小往き大來る」であり、斯様にして成立した泰卦を筮占得卦した際、その者に陽剛の德有れば、「吉にして亨る」（卦辭）のである。

3　否䷋

○　自漸卦而來、則九往居四、六來居三也。（本義）

否は泰の反卦であり對卦である。[3] 從って以下の如くすべて反對の論理と意義とを以て理解するのである。

否は、漸䷴の九三と六四との爻位の交換により得られた卦である。即ち漸の剛爻（九三、「大」）が上位に上り往き、柔爻（六四、「小」）が下位に下り來て否卦となる。これ即ち、卦辭に所謂「大往き小來る」であり、「君子の貞しきに利しからざる」（卦辭）理由である。

4　隨䷐

○　以卦變言之、本自困卦九來居初。又自噬嗑九來居五。而自未濟來者、兼此二變。皆剛來隨柔之義。（本義）

卦辭の「元いに亨る」のは、彼此相從いて通じ易いがためであることを次の三卦の爻位の交換により説く。

A　困䷮の初六と九二、　B　噬嗑䷔の六五と上九、

C　未濟䷿の初六と九二、ならびに六五と上九、

斯様に剛爻の下にあった柔爻との逆轉を示す爻變は、隨卦の眞意たる「剛の柔に從う」ことを鮮明に示すものである。ただ留意すべきは、正しい「隨柔」でなければならず、正道を守った「隨柔」であって初めて「咎なし」（卦辭）である、と警告する。

5　蠱䷑

○　或曰、剛上柔下、謂卦變。自賁來者、初上二下。自井來者、五上上下。自既濟來者、兼之。（本義）

蠱は隨の反卦であること、既出の泰・否の關係と同じであ

る。従ってこれまた反対の論理と意義とを以て次の如く理解する。

A　賁䷕の初九と六二、　B　井䷯の九五と上六、

C　既済䷾の初九と六二、ならびに九五と上六、それぞれの爻位の交換による。

斯様にして得られた蠱は陽卦の艮剛が上に居り、陰卦の巽柔が下に居って、上下交わらざる壞亂の卦であり、従って「元いに亨りて、大川を渉るに利しい」（卦辭）のである。

6　噬嗑䷔

○　本自益卦六四之柔上行、以至於五、而得其中。（本義）

象傳の「柔得中而上行」を説かんがための論理として、益䷩の六四と九五との爻位の交換を以てする。而してこの噬嗑卦は柔爻にして陽位に居る（六五）とはいえ、治獄の道たる威と明とを明らかにして、その中を得るを貴ぶ卦體となる。而して卦辭にいう「獄を用うるに利しく」、はじめて「亨る」こととなる。

7　賁䷕

○　卦自損來者、柔自三來而文二、剛自二上而文三。自既濟而來者、柔自上來而文五、剛自五上而文上。（本義）

賁は噬嗑の反卦ではあるが對卦ではない。従って反卦損を以て説く。然るに朱子は更に既濟を以てしても説こうとする。

A　損䷨の九二と六三、　B　既濟䷾の九五と上六、それぞれの爻位の交換による。

而して右の論理より齎らされる意義は卦德を以て説く次のことばによるのが理解に便である。

占者㊀以其柔來文剛、陽得陰助、而離明於内、故爲亨。以其剛上文柔、而艮止於外、故小利有攸往。（本義）

即ち、右のことばの傍線部㊀は彖傳の「柔來りて剛を文る」の解説であって、損卦で以て説かれ得るものであり、傍線部㊁は同じく彖傳の「剛を分ちて上って柔を文る」の解説であって、既濟卦で以て説かれ得るものである。換言すれば、損卦六三の柔爻が下り來り九二の剛爻を飾って「離明」となるが故に「亨る」（卦辭）のであり、既濟卦の九五が上り往き上六の柔爻を飾って「艮止」となるが故に「小しく往くところあるに利しい」（卦辭）のである。

8　无妄䷘

○　爲卦自訟而變。九自二來、而居於初。又爲震主。動而不妄者也。故爲无妄。（本義）

彖傳に云う「剛外より來りて内に主たり。動いて健やかに、剛中にして應ず」を、訟䷅の初六と九二との爻位の交換を以て説く。即ち、訟の九二が初の位に降り來って下卦震☳の主爻たる初九となる。下卦震は「動」であり、剛爻の初位（陽位）に居るは「正」である。冒頭の「本義」に云う「動いて妄ならざるもの」とはこの謂である。次に上卦乾☰は「健」である。而して大成卦无妄の九五は正に位に當たり、六二の柔爻と相應じている。かかる彖傳の解説より「无妄は

元いに亨る、貞しきに利し」の卦辭を導きだすのである。

9　大畜 ䷙

○　以卦變言、此卦自需而來。九自五而上。（本義）

大畜は无妄の反卦である。從って訟の反卦需䷄の九五と上六との爻位の交換により説く。即ち、需の九五（剛）が上の位に上り往くことを以て象傳の「剛上る」を説き、上六（柔）が五の位に降り來って大畜の六五となり、上九を上に戴く卦體を以て象傳の「賢を尚ぶ」を説くのである。而して大畜の卦德たるや、下卦の猛進上昇せんとする「健」（乾）を上卦を以てよく「止める」（艮）義でもある。これらの卦體と卦德とを觀察するに、正に「大正」（象傳）と稱するに足る姿であり、從って「貞しきに利しい」（卦辭）のである。

10　咸 ䷞

○　或以卦變言柔上剛下之義、曰咸自旅來。柔上居六、剛下居五也。亦通。（本義）

象傳の「柔上而剛下」を「柔上りて剛下る」と訓じ、旅䷷の六五と上九との爻位の交換を以て成卦の論理とする。即ち、旅の柔（爻）が上り剛（爻）が下るのである。而して陰陽の二氣が感應し、相ともに和合する。更に咸を小成卦に分かてば「止まりて説ぶ」（象傳）德を、又、「男が女に下る」（象傳）象を示している。斯様な理由によって、卦辭において「亨る」の占斷が與えられ、「女を取るに吉」の判斷が付されるのである。

11　恆 ䷟

○　或以卦變言剛上柔下之義、曰恆自豐來。剛上居二、柔下居初也。亦通。（本義）

恆は咸の反卦であるから、旅の反卦豐䷶を以て説く。即ち、象傳の「剛上而柔下」を「剛上りて柔下る」と訓じ、豐の初九と六二との爻位の交換を以て成卦の論理とするのである。而して豐の剛（爻）が上り柔（爻）が下ることにより、以下の四つのことが明らかとなる。なお、「　」内はすべて象傳のことばである。

イ　陽剛の小成卦が上にあり、陰柔の小成卦が下にある卦體となる。即ち、震剛上にあり巽柔下にあることとなる（「剛上にして柔下なり」）。

ロ　この雷・風二象の互いに助け合うことを示しているのが恆の卦象である（「雷風相與す」）。

ハ　その卦象はまた巽順震動の卦德を示すことでもある（「巽にして動く」）。

ニ　かつ大成卦としての恆の六爻は、剛爻と柔爻とが互いに應じ合っている（「剛柔みな應ず」）。

上記のことはすべて「本義」に云う「理の常」であり、そのためにこの卦が「恆」と稱せられ、卦辭において「亨る、咎无し」と占斷せられるのである。

12　晉 ䷢

○　其變自觀而來。爲六四之柔進而上行、以至於五。（本義）

觀卦䷓六四の柔爻が五の位に「進みて上り行き」（象傳）晉となる。即ち觀の六四と九五との爻位の交換である。晉は「進む」の意であり、この論理はそのまま六四の諸侯が五の君位に進み至り、その善政を賞譽せられて「馬を錫うこと蕃庶たり、晝日に三たび接わる」（卦辭・象傳）ことをあらわす。更に象傳に則していえば、この、日の地上に出でたる卦象は、明君上に在り萬物を照愛することを示すとともに、順從の臣が明君に付麗するを象徴することともなる。

13　睽䷥

○　以卦變言之、則自離來者、柔進居三。自中孚來者、柔進居五。自家人來者、兼之。（本義）

朱子はこの卦の卦變を説くのに次の三種の論理を以てする。

A　離䷝の六二と九三、　B　中孚䷼の六四と九五、

C　家人䷤の六二と九三、ならびに六四と九五、それぞれの爻位の交換による。

斯様にして得られた睽は、睽く時にあって「説んで明に麗き」（象傳）、「小事にのみではあれ吉を齎らす」（象傳）のである。それは右に示された如く、柔爻が上の剛爻の位に上り行き、その結果、六五の柔爻が中を得て九二の剛爻に應ずる卦體となるがためである。

14　蹇䷦

○　卦自小過而來、陽進則往居五而得中、退則入於艮而不進。故其占曰利西南、不利東北。（本義）

蹇は睽の對卦である。從って前條睽の由來する三卦のうち中孚の對卦小過䷽を以て説く。即ち、小過の九四と六五との爻位の交換によるものとする。而してその意義を彖傳に則して記せば次の二點に要約される。

イ　小過の九四は進み上り往ってこそ蹇の上卦の中位を得ることができるが、もし退き下り來った際には下卦艮に入りますます進めなくなる。從って「西南に利しく、東北に利しからず」④（卦辭）の占斷となる。

ロ　幸いにして小過の九四より進んで蹇の九五となった剛爻は中位を得て大人の象がある。而してこの卦は六二以上の五爻の正位を得た貞しさがあることにより、九五の大人の助力を蒙ることができる。從って蹇難の時に當たり、貞しさを守ることによって吉を得、邦を正すこともできよう。

15　解䷧

○　其卦自升來、三往居四、入於坤體。二居其所、而又得中。故利於西南平易之地。（本義）

解は蹇の反卦であるがために小過の反卦を以て説くべきであるが、小過の反卦はこれまた小過である。而して朱子は升䷭の九三と六四との爻位の交換を以て説く。即ち、升の九三が九四に上り往って源の坤體に入りこみ、また九二が中位を得ているがために「西南に利し」（卦辭）いのである。坤はまた「衆」を象徴する。從って西南平易の地に利しく、かつ速やかに往くことによってその地の「衆を得る」（象傳）

という吉なる結果を收めるであろう。それは升の九二が元のままの位にとどまり解の九二として中位を得ているがためである。

16　升 ䷭

○　卦自解來、柔上居四。内巽外順、九二剛中而五應之。是以其占如此。（本義）

升は既出の卦でいえば无妄の對卦であるから既述の論理に從えば訟の對卦明夷を以て説くべきである。然るに朱子は前條解䷧の六三と九四との爻位の交換によるものと考える。即ち、解の柔爻六三が時宜を得て九四の剛爻の位に進み上り「内巽外順」（本義）の升の卦德となり、中位を得た九二と六五とが相應ずる卦體を形成する。而して六五の大人の應援を蒙るのであるから、卦名の如く何の懸念もなく進み上りつづけ積極的に前進して吉なる結果を得る。

17　鼎 ䷱

○　卦自巽來、陰進居五、而下應九二之陽。故其占曰元亨。（本義）

鼎は巽䷸の六四と九五との爻位の交換による。而して五の中位を得て六五となった柔爻は、下の九二の剛爻と相應じているがために、鼎には「元いに亨る」（卦辭）という占斷が與えられるのである。

18　漸 ䷴

○　以卦變釋利貞之意。蓋此卦之變、自渙而來、九進居三。自旅而來、九進居五。皆爲得位之正。（本義）

卦名の「漸」とは「本義」によれば「漸進」のことであり、「遽かに進まざる」の義である。朱子はこの義を二種の卦變の論理を以て説く。

A　渙䷺の九二と六三、　B　旅䷷の九四と六五、

それぞれの爻位の交換による。

右の論理は、また「漸進」が女の嫁ぐのに六禮に則って進むが如く正道に適合したものであるべきことを彖傳に則して説くためのものである。即ち、不正の位にあった渙の九二と六三、旅の九四と六五とは爻位の交換によりともに正位を得て然るべき卦體となる。この正しき「漸進」であってこそ、邦家をも正しく導くことができるのである。なおこの卦は九五の剛爻が中位を得ており、更にその九五は六二と正應である。このことは正道を守ってこそはじめて吉なることを一層强調するのである。

19　渙 ䷺

○　其變則本自漸卦、九來居二而得中、六往居三、得九之位、而上同於四。故其占可亨。（本義）

渙は漸䷴の六二と九三との爻位の交換により得られた卦である。而して渙卦六三の柔爻は上位に居る六四の柔爻と志を同じくすることとなる。換言すれば漸卦九三の剛爻が初の位に下り窮まってしまうのではなく渙卦九二として中位を得ることでもある。彖傳に云う「剛來りて窮まらず、柔位を

外に得て上同す」とはこのことであり、さればこそ「渙は亨る」（卦辭）のである。

二　卦變説の性格

ここにいう「性格」とはその「特徴」のことである。それは「特徴」を述べることによって自ずと「性格」にまで引伸できるものと考えるがためである。

思うに周易六十四卦のうち、基本となる乾坤二卦を除く六十二卦の卦變説を想定することは、荀・虞以来の卦變を説く者の當然の願望である。然るに「本義」中の卦變説は單に十九卦のみにとどまっている。然らば朱子は何故に十九卦のみに卦變を説いたのであるか、という疑問がおこってくるのも自然である。

この疑問の解答を先に示せば、それは象傳に説く「剛柔の上下・往來（剛爻と柔爻との上（升）り下り・往き來）、ならびにそれらに類することば（たとえば「進」）」にあったものと考えられる。これを端的にいえば、象傳の「上下」・「往來」の語は漢易以來の傳統的卦變を基礎として説かざるを得ぬ、という認識が朱子にあったのである。この認識のもとに論者が試みにそれらのことばを彖傳に則して檢覈した際には次のようになる（括弧内に記したのは象傳に説く「上下」・「往來」等のことばである）。

1　訟（剛來而得中）、　2　泰（小往大來）、　3　否（大往小來）、　4　隨（剛來而下柔）、　5　蠱（剛上而柔下）、　6　噬嗑（柔得中而上行）、　7　賁（柔來而文剛・分剛上而文柔）、　8　无妄（剛自外來而爲主於内）、　9　大畜（剛上而尚賢）、　10　咸（柔上而剛下）、　11　恆（剛上而柔下）、　12　晉（柔進而上行）、　13　睽（柔進而上行）、　14　蹇（往得中）、　15　解（往得衆）、　16　升（柔以時升）、　17　鼎（柔進而上行）、　18　漸（進得位・進以正）、　19　渙（剛來而不窮）、

而して「本義」は右の十九卦の象傳のことばに則して逐條的に由來する卦を示し、爻の「上下往來」、即ち「爻變」によって一卦の意義を説く資の一端としたのである。その結果、これをかりに「相生圖」の呼稱に從えば、

四陰の卦　四卦（晉・蹇・解・升）、　四陽の卦　五卦（訟・无妄・大畜・睽・鼎）、三陰の卦　四卦（泰・蠱・賁・恆）、三陽の卦　六卦（否・隨・噬嗑・咸・漸・渙）

にのみ卦變説を立てるという不均齊なる卦の分布となったものと思われる。

然らば次に右にいう朱子卦變説における「爻變」の方法が問われることとなる。これまたその解答を先に示せば、「相隣する柔（剛）爻と剛（柔）爻との爻位の交換による」ものといえる。

蓋し荀・虞以來、卦變の定法としての「往來」とは、下卦より上卦へ升り往くに「往」といい、上卦より下卦へ降り來るに「來」と稱するのが基本であり、それは特に三陰の卦・三陽の

卦において顯著であった。そのことは、小成卦としての上卦と下卦との峻別であった。然るに朱子は斯様な峻別を無視して、上卦・下卦を問わずすべて上爻と下爻との關連において「往」といい、「來」と稱するのである。[17] 然らばその卦變説は窮極的には、「卦變」は「大成卦全體の中での『爻變』によって形成される」との認識のもとに立説されたものといえよう。而してその細部は文末の一覧表に詳らかであるが、朱子卦變説十九條のうち上卦と下卦との爻變による泰・否・解・升四卦以外の十五卦の成立が、すべて上卦又は下卦のみでの爻變によっていることを見れば、そのことは自ずと明白である。

なお、ここに付言すべきは、彖傳に所謂「内」・「外」の語をも「内卦」・「外卦」とせずに「内爻」・「外爻」の意と解していることである。たとえば既述の无妄の彖傳に云う「剛外より來りて内に主たり」を訟の初六（内爻）と九二（外爻）との爻變により説くが如きはそれである。一般に无妄は遯の上九（外卦）が初（内卦）に來り内卦震の主爻となる[18]（「周易集解」虞翻・蜀才説）、或いは反卦大畜の外卦上九が内卦初九、即ち震の主爻となる（朱震説）、と理解することによって説くのであるが、それらと比して多分に趣きを異にしている。

朱子の斯様な認識と方法は、泰・否二卦を歸妹・漸二卦の三四の爻變により説くことにおいて特に著しい。泰・否二卦が十二消息卦のうち正月と七月とにあたり、卦辭に所謂「小往き大來る」と「大往き小來る」の「小」とは「陰」を謂い「大」とは「陽」を謂うことは、「本義」にも云うところである。又、「本義」では泰に「坤往きて外に居り、乾來りて内に居る」とし、否に「乾往きて外に居り、坤來りて内に居る」として卦體を以て内外を論じ、泰の否により否の泰による「往來」を説いている。然らば根源的には、泰の坤により否の乾によること自明である。蓋し、朱子の説くこの卦體の往來は、荀・虞以來の所謂傳統的卦變説の中で「卦變」として取り扱うところの典型である。然るに通説ではすべてこれを朱子卦變説の中に入れず、上述の如く卦體の往來として考えるもののようである。察するところ、通説は大成卦全體の中での相隣する位の爻變を以て卦變なりとする朱子卦變説の枠内に入れぬを賢明としたのであろう。ただ明儒董守諭[19]がその著「卦變考畧」の泰卦の條において、この卦體の往來をば朱子卦變説として積極的に取りあげているのは、その受容態度の上で考えさせられるものがある。而して彼は歸妹の泰に變ずることについては存疑としつつも一應の理解を示すにとどまっている。今その要點を左に示し、これによって反卦否の卦體の往來と漸の否に變ずることについても同様の理解が可能であることを類推しておく。[20]

論曰、雜卦曰、否・泰反其類也。此明疏也。朱子坤往乾來之變當矣。及考漢儒解歸妹曰、泰三之四、是泰變歸妹、非歸妹變泰也、似不可以無辨。

最後に右の所論を徹底させるがために、その論理と意義との關連について記しておく（文末の表參照）。

思うに朱子の爻變の論理を以てすれば、十九條のそれぞれに朱子の擧げる由來する卦以外にもなお多くの由來する卦を想定することができる。論者がその卦を想定した際には、賁の八卦、噬嗑・蹇の各七卦を始めとして都合八十四卦を擧げ得るのである。[11] そのうち朱子の擧げる二十七卦を除いても他に五十七卦が存在することとなる。然らば朱子は何故にその五十七卦を排して二十七卦に限定したのかという疑問がおこる。この疑問は想定された八十四卦のすべてを象傳に説く「上下・往來」から齎らされるところの意義と照合檢覈することにより一應氷解する。而して論者がその作業をした結果、賁・漸二卦を除いて朱子の擧げる卦以外にその由來する卦を見出すことが不可能であった。たとえば由來する卦を困・噬嗑・未濟の三卦に求める隨では、論理上その外に既濟・井・賁の三卦をも想定し得るのであるが、象傳の「剛來りて柔に下る」の文と照合した際には全く一致しない。

ただここに問題となるのは前記の賁・漸の二卦である。賁の損・既濟に由來し、漸の渙・旅に由來することは朱子の説くところであるが、そのほかにも賁では蠱・噬嗑・未濟・節・井・隨の六卦、漸では否・未濟の二卦を爻變の論理により想定することができる。而してそのうち、賁では損・既濟二卦の變を兼ねた節、漸では渙・旅二卦の變を兼ねた未濟にも象傳のことばを照應させ得るのである。これを表示すれば次の通りである。

卦	朱子卦變説	上欄の二變を兼ねた想定の卦	象傳	象傳と合わないが爻變の論理により擧げ得る卦（參考）				
賁 ䷕	損 ䷨（二三の爻變）	既濟 ䷾（五上の爻變）	節 ䷻（二三と五上との爻變）	賁、柔來而文剛、故亨。分剛上而文柔、故小利有攸往。	蠱 ䷑（初二の爻變）	噬嗑 ䷔（三四の爻變）	未濟 ䷿（初二と三四との爻變）	井 ䷯（初二と五上との爻變）	隨 ䷐（三四と五上との爻變）
漸 ䷴	渙 ䷺（二三の爻變）	旅 ䷷（四五の爻變）	未濟 ䷿（二三と四五との爻變）	漸之進也、女歸吉也。進得位、往有功也。進以正、可以正邦也。	否 ䷋（三四の爻變）				

論者の管見の及ぶ限りでは右の圖の如き指摘するものを見ない。もしこの拙考に誤りなしとすれば、朱子卦變説十九條は節・未濟二卦を加えて二十九卦に由來することとなる。この點、或いは朱子の後學に與えた課題のひとつであり、又、「蓋し（卦變は）易中の一義にして、畫卦作易の本指にあらざるなり」（「本義」卦變圖序）と卦變による經傳の解釋を第二義的なものと斷じ、深く追究することを避けた朱子の本意がはしなくもこの闕漏を齎らしたのであったのかも知れない。論者が先に二十七卦を由來とすることを「一應氷解する」と記した「一應」の意はここにある。これらのことについてはなお大方のご教示を仰ぎたいところである。[19]

結語

序言にも記した如く本稿を以て「朱子卦變」考察の基礎としたい。朱子卦變説を以て遷就自在にして信を置く能わず、「朱子自らの卦變（朱子の主觀による卦變説）」なり、と貶するのは黄宗羲「易學象數論」であるが、なるほどその卦變説は歴史的にみて變貌しているとはいえ、やはり荀・虞以來の傳統的卦變説の枠内において論ぜられるべき性質のものである。本稿ではこのことについての意を充分には盡くし得なかったが、その卦變説の由來を考察することにより逐次明白になるものと考えている。今は別稿への橋渡しのことばを以て結語とする。

〔補記〕筆者は、現在、加療中のため、当研究室が校正等を行なった。もし誤植その他の思わぬ過誤があるとき、その責任は筆者ではなくて、当研究室にある。

「本義」卦 説一 表（「由來の卦」欄の剛爻に付した○、柔爻に付した●は「爻變」を示す。「論理」欄の文は與う限り簡略化した。又、「上下」「往來」等の語の右に●を付し檢覈を容易にした。）

卦	由來の卦	論理
䷅ 訟	䷄ 遯	剛來・居二。
䷊ 泰	䷵ 歸妹	六往・居四、九來・居三。
䷋ 否	䷓ 漸	九往・居四、六來・居三。
䷐ 隨	䷮ 困	九來・居初。
	䷧ 噬嗑	九來・居五。
	䷿ 未濟	兼此二變（九來・居初、九來・居五。）
䷑ 蠱	䷂ 賁	初上・二下。
	䷯ 井	五上・上下。
	䷾ 既濟	兼之（初上・二下、五上・上下。）
䷔ 噬嗑	䷩ 益	六四之柔・上行、以至於五、而得其中。
䷕ 賁	䷨ 損	柔自・三來・而文二、剛自二上・而文三。
	䷾ 既濟	柔自・上來・而文五、剛自五上・而文上。
䷘ 无妄	䷅ 訟	九自二來、而居於初。
䷙ 大畜	䷄ 需	九自五而上。

卦	由來の卦	論理
䷞ 咸	䷭ 旅	柔上・居六、剛下・居五。
䷟ 恒	䷶ 豐	剛上・居二、柔下・居初。
䷢ 晉	䷓ 觀	六四之柔・進而上・行、以至於五。
䷥ 睽	䷝ 離	柔・進・居三。
	䷼ 中孚	柔・進・居五。
	䷤ 家人	兼之（柔・進・居三、柔・進・居五。）
䷛ 蹇	䷽ 小過	陽・進・則往・居五而得中、退則入於艮而不進。
䷧ 解	䷭ 升	三往・居四、入於坤體。二居其所、而又得中。
䷬ 升	䷧ 解	柔上・居四。內巽外順、九二剛中而五應之。
䷱ 鼎	䷸ 巽	陰・進・居五、而下應九二之陽。
䷴ 渙	䷨ 渙	九・進・居三。
䷐ 漸	䷭ 旅	九・進・居五。
	䷴ 漸	九來・居二而得中、六往・居三、得九之位、而上同於四。

註

① 以下、本稿において引用する「易本義」の文は、すべて、中華民國六十年十一月一日、華聯出版社印行の、影印國子監刊本、田中慶太郎校訂「周易本義」に依據する。

② 日本中國學會報第三十八集所收。

③ 本稿では朱子再傳の元の胡一桂の説により「反卦」と「對卦」とに區分して稱することとした。次にその文を掲げる。

上經、乾與坤對、頤與大過對。下經、中孚與小過對。陰陽爻、各各相對也。何謂反。如屯反爲蒙、既濟反爲未濟、一卦反爲兩卦也。對者八卦、反者二十八卦、而六十四卦次序成矣。（胡一桂「周易啓蒙翼傳」上篇、文王六十四卦反對圖）

④ この占斷辭の方位については疑いの存するところである。即ち、下卦艮の「東北の卦」であることは説卦傳（「本義」分章第五章）に明示するところであるが、上卦坎の「西南」については説卦傳に徵して不明であるからである（説卦傳同章には坎は「正北方の卦」とある）。これについて「朱子語類」では「變例」として結局は坎の由來を坤に求めることで解決している。思うにその根據は、類推の域を出ぬものの漢上卦變説に求められるべきものであろう。朱震は蹇卦に至るまでの次序を精しくは、臨䷒→明夷䷣→小過䷽→蹇䷦とするのであるが、要するに小過の四五相易によって生ずる蹇の九五の源流は臨の六五である。從って臨の上卦坤☷を以て彖傳を解し卦辭を説かねばならぬ、と考えるのである。今、その要旨を左記するが併せて前掲②の拙稿をも參照されたい。

蹇自臨來。小過變也。九四往之五。小過之五、即臨之坤也。坤西南。（漢上易傳卷四）

⑤ 因みにいえば、この認識は後世にまで繼承されたのであるが、彖傳に説く「剛柔の上下・往來」の受容態度には學者によって若干の差異がある。たとえば「損」「益」「乘」等の語をも「上下」「往來」と同一視することなどがそれである。今、朱子説とともに三人の學者の説について卦名のみを以て表示しておく（○印の卦に「上下」「往來」を説くと考えるのである）。

人名＼卦名	需	訟	泰	否	隨	蠱	噬嗑	賁	无妄	大畜	咸	恆	晉	家人	睽	蹇	解	損	益	升	鼎	漸	歸妹	渙	節	卦數	參考
朱子		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○			○	○	○		○		19	以彖辭考之、説卦變者、凡十九卦。（語類卷六十七）
胡一桂		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○			○	○	○		○	○	20	胡一桂（一三世紀元初の人。方平の子。字は庭芳、號は雙湖。）説卦變、凡二十卦。（周易啓蒙翼傳上篇）
潘耒		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○			○	○	○	○	○		○	○	20	潘耒（一六四六―一七〇八。字は次耕。顧炎武の弟子。）易彖辭言剛柔之上下往來者、二十卦。（遂初堂易論）
東涯																										20	伊藤東涯（一六七〇―一七三六。）彖言卦變者、凡二十卦。（周易卦變考）

⑥ この呼稱はまた「本義」の篇首に掲げる「卦變圖」に繼承されてゆくのである。

⑦ この上卦と下卦との峻別を無視する朱子の「往」「來」の受容態度は故なしとしない。精しくは拙稿「虞翻の卦變說について」（北海道中國哲學會刊「中國哲學」第十三號所收）八十五頁の註③を參照されたい。

⑧ 遯の上爻が初爻に之き順次に升らせるのである（右の拙稿五十三頁參照）。

⑨ 董守諭　一五九六～一六六四。鄞縣（今の浙江省寧波市付近）の人。字は次公。その著「卦變考畧」の篇末に

或謂、變乃易中之一義、非畫卦作易之本指。愚獨以爲、不然、無變是無全易也、無處下手讀卦辭・彖・象・六爻也。

とあるように、殊のほか卦變を力說した學者である。他に「讀易一鈔二鈔」・「易韻補遺」等の著がある。

⑩ 董氏のことばを否卦に推及して類推すれば次のようになろう。

朱子乾往坤來之變當矣。及考漢儒解漸曰、否三之四、是否變漸、非漸變否也、似不可以無辨。

思うに、爻に即して剛柔を、卦に即して陰陽を說くのが易傳の原義である（今井宇三郎「易傳における陰陽と剛柔」―東京大學出版會發行「氣の思想」所收）。然るに「本義」では、この原義を無視して爻にも陰陽を以て稱するので甚だ混亂を招きやすい。ところで、この卦體の往來を以て說く泰・否二卦に對する「坤往きて乾來る」・「乾往きて坤來る」という「本義」のことばの「乾」・「坤」は、明らかに易傳の原義である小成卦としての「乾（陽）☰」・「坤（陰）☷」を示している。察するに董氏は、斯樣な線に沿って爻變による卦變說とは別に、特に積極的に朱子卦變說として取りあげたのであろう。

⑪ 朱子卦變說十九條の由來する卦は二十七卦である。而して二十七卦の爻變の組み合わせを檢覈すれば次の七種類となっている。

初・二	四卦	二・三	五卦	三・四	四卦	四・五	六卦
五・上	五卦	初・二と五・上	二卦	二・三と四・五	一卦

なお、このほかにも二種の爻變を兼ねさせれば更に次の四種類の組み合わせを考えることができる。

初・二と三・四	初・二と四・五
二・三と五・上	三・四と五・上

然らばその組み合わせは都合十一種類となる。この十一種類を基礎として組み合わせてゆけば合計八十四卦となる。も

ちろん、剛爻と剛爻、柔爻と柔爻との爻變はあり得ないからこれを除外するわけである。

⑫ これらのことについて追究するのは黄宗羲「易學象數論」であるが、その所論は徹底性を缺いている。この點、拙稿において徹底させ得たものと考えてはいるがなお不備のおそれあるやも知れぬのでご教示を仰ぎたい。次に「易學象數論」巻二「卦變」の條の要點を摘録しておく（括弧内は黄氏自注）。

……就以其法推之、此十九卦中、朱子之所舉者、亦有未盡。訟之自无妄（初二相換）、自巽（三四相換）、隨之自既濟（三四相換）、蠱之自未濟（三四相換）、……復得二十九卦、而兼之者不與焉。……

平成己巳一月八日　脱稿